

# 力をつけるモデル文にはどのようなものがあるか

古賀 太一朗

## 1. 本実践研究の意図

本稿は、「力をつけるモデル文にはどのようなものがあるか。」ということの問題意識にして取り組んできた実践研究である。これまで、単元を通した言語活動では、学習の導入に教師が言語活動のモデル文を提示し、モデル文に向かって、児童は見通しをもって学習に取り組んできた。そのモデル文は、既習の学習材をもとに、作成したものがほとんどであった。そのため、モデル文をそのままコピーしたような児童も少なくはなかった。

そこで、新聞記事に掲載してある人物紹介コラムを書くという言語活動に取り組み、モデル文を実際の新聞記事をもとに教師が作成したものにする。さらに、モデル文は複数パターン用意する。そうすることで、児童が自ら読み取ったことを、自分の言葉で書き表すことができると考えた。また、単元前に行っていた「人物の関係を表す言葉集め」で習得した語彙を活用することで、人物の関係のついて読み取ったことを適切に表現できると考えられる。既習の学習材をもとに作成したものでなく、生活の中にある文章をもとに作成したモデル文を取り扱う言語活動を通して、本単元で育成を目指す資質や能力の育成を図ることを意図して本実践研究を行った。

## 2. 単元 登場人物の関係について綴った（ひと）発表会をしよう。

### 2.1 児童について

本学級の児童は、これまでの「風切るつばさの人物プレゼン発表会をしよう」で「風切るつばさ」の作品を使った「人物のプレゼンテーション」という言語活動を通して、中心人物が物語を通して、どのように変容したのかを読む学習を経験している。その学習経験において、人物の行動や心内語と人物の心情と関連付けることで、中心人物の変容を読む力を習得している。また、「戦争に関する本のビブリオバトルをしよう」では、「ヒロシマのうた」の作品を使い、「ビブリオバトル」という言語活動を通して、感動やユーモア、安らぎなどを生み出す叙述に着目して自分の考えをまとめる学習を経験した。それぞれが選んだ戦争に関する本について、心に残る文章を場面の展開に沿って評価し、おすすめのポイントとして紹介することに取り組むことで、優れた叙述に着目し、自分の考えをまとめる力を習得している。

一方で、これからの学習では、これからの学習では、学習指導要領にも示されている登場人物の相互関係について、描写を基に捉える力を習得していく必要があると考えている。

### 2.2 単元について

#### (1) 単元の目標

- ・登場人物の相互関係について、描写を基に捉えることができる。

#### (2) 本単元で育成を目指す力

- ・登場人物の相互関係について、描写を基に捉える力。

#### (3) 本単元における言語活動

本単元の言語活動として新聞の人物紹介欄のように物語の登場人物の紹介文を書く「人物紹介コラム（ひと）」とした。人物の紹介をするためには、その人物の経歴や生き方、人物の関係を知る必要が

ある。つまり、児童は物語のあらすじや人物の関係を捉えようとしながら読んでいくと考える。また、コラム記事はエッセイと違い、根拠を明らかにしながら自分の意見を書く必要があるので、物語のできごとや会話を根拠としながら、自分の考えをまとめることができると考える。従って、本単元でねらう「登場人物の相互関係について、描写を基に捉えること。」を実現するのにふさわしい言語活動であると考えた。また、本単元で取り扱う作品「海の命」（東京書籍6年）は、海に生まれた太一が、父や与吉じいさの死を乗り越え、村一番の漁師に成長する姿を描いた作品である。太一が父や与吉じいさの漁師としての生き方に触れ、漁師として成長していく姿から、登場人物の関係を捉えることができる。また、「海のめぐみだからなあ。」という父の言葉や「千びきに一びきでいいんだ。」という与吉じいさの言葉のように、中心人物の行動に影響を与える会話文もあり、「人物紹介コラム（ひと）」を行うのに適した教材であるといえる。

#### (4) 単元で扱う学習材

- ・ 作品「海のいのち」（東京書籍6年）
- ・ 「カレーライス」（東京書籍6年）＊力を確かめる活動の問題文として使用
- ・ 学習プリント、モデル文

本単元において、取り扱うモデル文は「朝日新聞DIGITAL」および「毎日新聞」に掲載されている人物紹介コラム（ひと）を参考に教師が作成した。資料を選択する規準として、児童が知っていそうな人物を紹介している記事、人物と人物の関わりを紹介している記事の2点を定めた。

- ・ モデル文作成にかかる参考資料

朝日新聞DIGITAL （ひと）神谷明日香さん 2018年1月8日掲載

朝日新聞DIGITAL （ひと）十代目・松本幸四郎さん 2018年1月4日掲載

朝日新聞DIGITAL （ひと）吉田鋼太郎さん 2018年12月16日掲載

毎日新聞 （ひと）稲葉篤紀さん 2017年8月1日掲載

毎日新聞 （ひと）藤井聡太さん 2016年9月4日掲載

毎日新聞 （ひと）春風亭昇太さん 2016年5月31日掲載

毎日新聞 （ひと）海部陽介さん 2016年2月26日掲載

#### (5) 単元を通じた学習課題

登場人物の関係とそれについての自分の考えを、  
物語の会話文とできごとを関係づけて、  
人物紹介コラムのように書く。

#### (6) 単元の評価規準

- ・ 物語の会話文とできごとを関係づけて、登場人物の相互関係を捉え、人物の関係について「人物紹介コラム（ひと）」に書いている。
- ・ 文章を特徴付ける語句が使用されていることに気をつけて、文章を読んでいる。

#### (7) 単元中および単元前後の指導

本単元では、人物の関係とはどういうことなのかを知り、そして、人物の関係を考えてそれを表す語彙を使いこなすことが必要である。

そのために、単元中は、人物の関係には「先生」と「生徒」や「親」と「子」のようなつながりが目に見える関係以外にも、「信頼できる先生」と「信頼できる生徒」などの目に見えない心の関係があること。また、人物の関係は場面の移り変わりによって変わるものもあること。そして、人物の関係を説明するためにはどのように表現すればよいかということ。人物の関係を考えるには、物語全体を通し

て会話文や出来事を関係付ければよいこと。上記の4点について学習プリントを準備し、児童の実態に合わせて指導をしていった。

年間を通して、語彙量を増やす取り組みをおこなった。テーマに合わせた言葉を調べ、例文と一緒にまとめる「言葉の宝箱」を家庭学習に取り入れている。単元前には、調べてきた語彙の中から人物の関係を表す言葉にしぼり、関係学級でまとめ、共有する時間を設けた。単元の学習期間中、まとめたものを教室に掲示した。

単元の学習後は、身につけた力（登場人物の関係を捉える力）が生かせるように、読書を勧めた。

### (8)単元の系統

物語を読むことに関わった前単元は、「人物の行動や心内語と人物の心情と関連付け、中心人物の変容を捉えながら読む。」本単元では、「物語のできごとや会話文を関係付け、登場人物の相互関係を捉えながら読む。」ことを目標とし、次の学年の単元での「場面の展開や登場人物の相互関係、心情の変化などについて、描写を基に捉える。」ことの習得へとつながることを目指す。

### 2.3 単元計画

単元開きにおいて児童と作成した学習計画をもとに、以下の学習計画を配布した。

**単元 登場人物の関係について綴ったひと発表会をしよう。**

学習課題

登場人物の関係とそれについての自分の考えを  
物語の会話文とできごとを関係つけて  
人物紹介コラム「ひと」のように書く

氏名( )

1 学習計画 10 時間くらい  
1 単元の見直しをもつ

2 問いの立て方  
(ア) (出来事)と「会話文」からわかる  
の関係を紹介する。びったりな表現はなんだろうか。  
(イ) の関係を、「ひと」で紹介するには、  
どの「出来事」と「会話文」を関係づけたいか。

3 「ひと」の書き方・・・全体  
○ はじめ、できごとや会話文を使って人物についての簡単な紹介 ①(みんな) ②( ) ③( ) ④( )  
○ なか・人物と人物の関係を中心としたあらすじ ⑤( ) ⑥( )  
○ おわり・物語を通して人物の関係についてのまとめと自分の考え ⑦(みんな) ⑧( ) ⑨(それぞれ)  
4 「ひと」を書くためのポイント・・・全体  
○ あらすじをとらえる  
○ 「会話文」と出来事を関係つけて考える。  
○ 登場人物の関係を考えひびつたりな言葉で表す。

5 登場人物の関係を考え、話し合ひ・・・班  
(ア) だれの「ひと」を書くか選ぶ  
(イ) 段落を分担する  
(ウ) 自分達の班の「ひと」はだれとだれのどんな人間関係か。  
の人間関係は ですか。

6 「ひと」を書く・・・それぞれ・グループ  
発表の練習

7 発表の練習

8 「ひと」発表会  
発表を聞いてその「ひと」についての自分の考えを書く・・・それぞれ  
まとめ ①先生から  
②単元の振り返り  
なを確かめる

10 11

10 時間目

8 時間目

7 時間目

3 時間目

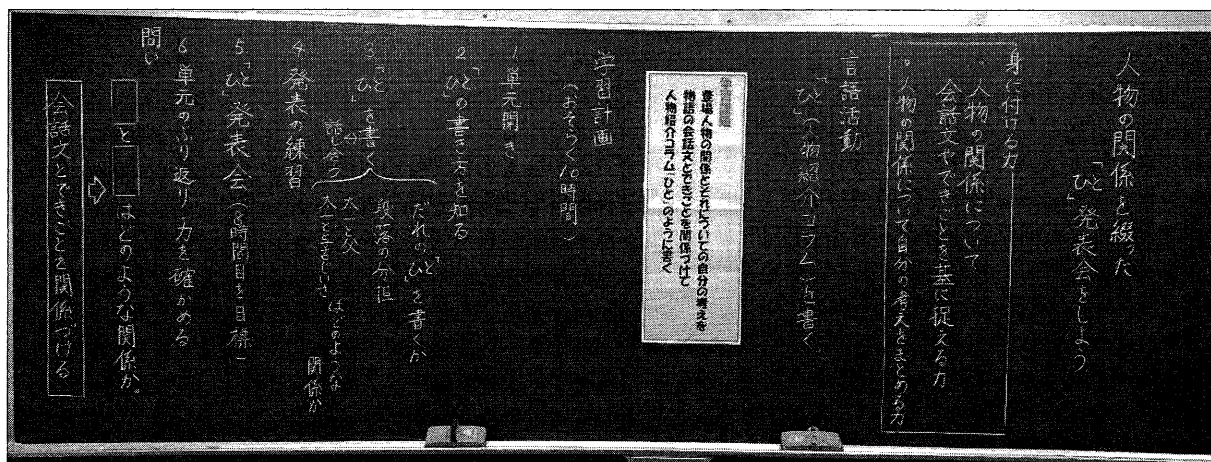
2 時間目

1 時間目

児童に配布した学習計画

## 2.4 板書の例

下の板書は単元開きのときのものである。



単元びらきの板書

## 3. 本単元の言語活動と評価

### 3.1 言語活動とその指導

学習プリントは、B4サイズの内紙で、①学習計画、②(ひと)原稿用紙③人物と人物の関係を考える④できごとと会話文を関係づける⑤人物の関係を考えびつたりな言葉で表すには⑥あとき・このときの人物の関係を考える⑦振り返り(2～6時間目)⑧会話文に網掛けをした全文の計8枚を一つに綴じ使用した。また、モデル文は朝日新聞の人物紹介コラム(ひと)をもとに、6パターン(6人の人物)作成し、B5プリントに印刷し6枚使用した。

実際に児童が言語活動に取り組んでいる様子は、モデル文を参考にしながら意欲的に学習に取り組んでいた。(ひと)を、各個人を段落毎に分担させ班で1枚作成することで、個人の学習を進めると同時に互いの成果を確認しながら、話し合っていた。また、本文を何度も読み返したり、人物同士がどのような関係なのかを班の友達と何度も対話をくし返したりしながら学習を進めていた。そして、言語活動で作成したものを共有するために「人物紹介コラム(ひと)」の発表会を行った。児童は、各班の発表を聞き、その「人物紹介コラム(ひと)」について自分の考えをまとめながら、発表会に参加していた。ここでの考えとは、登場人物の関係がどのように表現されていたか、または、どの文章から読み取っていたかなど、学習課題に関連した考えとした。その後、発表についての感想や質問を行うことで、自分の学びを確認したり、新たなことに気付いたりしてした。

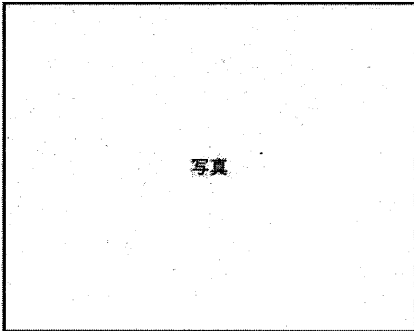
言語活動に関わる指導として、単元前にモデル文である教師が実際の新聞記事をもとにして作成した(ひと)を毎日1枚配布し、教師による範読を行った。教師が(ひと)をていねいに扱うことで、言語活動に取り組む際の動機付けになることをねらった。次に、モデル文から「人物紹介コラム(ひと)」の書き方やポイントを見つけさせた。(ひと)の段落構成を下記のように伝え、学級全体で共有した。1段落に人物についての簡単な紹介を班で話し合って書く。2～4段落には、人物の関係を中心としたあらすじをそれぞれ分担して書く。5段落には、物語を通した人物についてのまとめを班で話し合って書く。6段落には、人物の関係についての自分の考えをそれぞれに書く。

また、単元の最後に、「カレーライス」を用いた力を確かめる活動を位置づけた。言語活動を通して付けた力を別の学習材に活用することができるかを評価し、単元における学びのまとめとした。

「笑点」6代目大喜利司会者を務める

ひと

しゅんぶうていしやう た  
春風亭昇太さん(56)



写真

いつもの銀鼠(ぎんねず)色の着物でにこやかに登場。51年目に入った人気演芸番組「笑点」(日テレ系)の6代目大喜利司会者として、29日の初回の生放送を軽快に仕切った。番組の歴史と共に歩み、司会を10年務めた桂歌丸さん(79)からバトンを託された。「緊張すると思っていたら意外としなかった。昇太いいぞ!という感じですね」と、司会を終え余裕の笑み。その後の記者会見でも「100点満点だったら160点はいったと思う。だてに長く落語家をやっていないなと思います」と自信をチラリとのぞかせた。

子供のころからお笑い好き。「役者かコント芸人か噺家(はなしか)になりたかった。よく考えてみたら噺家の立場なら全部できると思った」と、1982年に春風亭柳昇に入門した。「ストレスの海」など現代的で斬新な新作落語を創り、当代の新作派をけん引。一方、古典落語も噺の本質をギョウツとつかんで再構築し、独特のセンスで聴かせる。春風亭小朝さんらと作る「六人の会」のメンバーとして落語界の活性化にも尽力。「好きなこと順番にやっています」と、活躍は高座にとどまらず、ドラマや舞台、音楽と幅広い。中学生からの城巡りの趣味が高じて、「城あるきのススメ」も著した。45歳の林家三平さんも加わり、新時代を迎えた「笑点」。「自分らしくやるしかないな」と高座同様、自然体ですがすがすがしい。桂歌丸さんから託された笑点の司会という伝統あるバトン。昇太さんのにこやかな表情はまさに笑点の顔といった印象である。

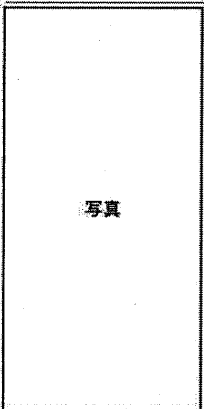
文・濱田元子  
古賀太一朗

教師が作成したモデル文(一部)

しゅんぶうていしやう  
蛭川幸雄さんの志を受け継ぐ俳優

ひと

よしだ こうたろう  
吉田 鋼太朗さん(59)



写真

四百年前の戯曲に命を吹き込む熱量、心臓をわしづかみにする声。「鋼太朗がいなきや、日本のシェイクスピアはつまらない」。師と仰ぐ演出家の故蛭川幸雄さんをして、そう言わしめた。「彩の国さいたま芸術劇場」で師が進めてきたシェイクスピア全戯曲の上演はあと五本。後継者として演出・主演する「アテネのタイモン」が開幕した。

古に臨んだ。「そこのお前、踊れえ」と怒られ、初日で逃亡。舞台を中心に経験を積み、四十一歳で再会。「今の俺を見てくれ」。二週間練った演技をぶつける。「好きなことをやっていますよ」。免許証を得た気がした。主役に抜擢(ばってき)されシェイクスピアの作品は、英国でも称賛を浴びた。鮮烈な視覚美で知られた蛭川さんは晩年、「言葉」に血を通わすことを最も大切にしていた。「自分がやりたいことも同じ。蛭川さんのやり方で、俳優たちとシェイクスピアを全身全霊で立ち上げます」。吉田さんが演出・主演するシェイクスピアの中で、蛭川さんの思いは生き続けることだろう。逃げ出した過去から、認められるまでの二十年間、吉田さんにとって、蛭川さんは自分を認めさせたい憧れだったに違いない。そして、憧れの存在から認められ、師から弟子へ、四百年前の戯曲を通じて、表現者として思いが受け継がれている。

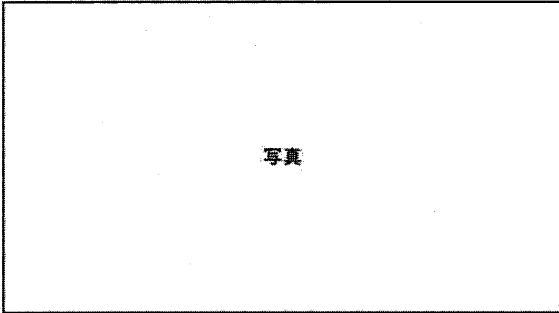
文・増田愛子  
古賀太一朗

教師が作成したモデル文(一部)

海のいのちを守り続ける

ひと

太一さん



写真

小さい頃から、父に憧れて漁師になりたいと言っていた。今では、嵐さえもね返す頑強な漁師になり、師匠の与吉じいさまに、「自分で気づかないだろうが、おまえは村一番の漁師だよ。太一、ここはおまえの海だ」と、認められるほどに成長した。

与吉じいさまは嫌だったろうが無理やり弟子になった。だが漁師は思っているよりずっと厳しく、与吉じいさまの海だから、始めのころはつり糸さえにぎらせてもらえなかった。弟子になり何年もしたころ与吉じいさまが声をもらした。「自分で気づかないだろうが、お前は村一番の漁師だよ。太一、ここはお前の海だ。」太一の海になったから、与吉じいさまは漁師をやめ、太一にバトンを託した。それから毎日与吉じいさまについた魚を届けていた。ある暑い日、与吉じいさまが毛布をかけ寝ているのを見て全てをささった。そう、父と同じように海に帰っていったのだ。

文・四班 絵・伊勢秀子

言語活動で児童が書いたもの(一部)

Table with 5 columns: 児童A, 児童B, 児童C, 児童D, 児童E. Each column contains a student's written text about their father and fishing.

言語活動で児童が書いたものを、児童別にまとめた表(一部)

### 3.2 評価

評価規準にもとづき、次のように評価を行った（一部）。

#### (1) 児童A

「ぼくは漁師になる。おとうと一緒に海に出るんだ。」という会話文や「二メートルもある大物をとめても父は自まんすることはなかった。」という会話文を関係付け、太一と父の関係を「太一は父が好きだった。」や「そんな父に太一は憧れ、尊敬していた。」というように表現している。評価規準の「物語の会話文とできごとを関係づけて、登場人物の相互関係を捉え、人物の関係について人物紹介コラム（ひと）に書いている。」について十分評価することができる。

「カレーライス」を用いた力を確かめる活動では、「ひろしとひろしのお父さんは親子であり、お互いに好きだ。しかし、あることでけんかをしてしまう。（中略）二人をつなげたのはカレーだった。同じなべの中辛のカレーを食べたことで、お父さんはひろしの成長を感じ、ひろしはお父さんに成長したことを分かってもらえて、仲直りしたと思った。」とひろしと父の関係を会話文や出来事から捉えることができている。

これらのこととから、「登場人物の相互関係について、描写を基に捉える力。」について習得できたと考えられる。

#### (2) 児童B

「自分では気づかないだろうが、お前は村一番の漁師だ。太一、ここはお前の海だ。」という会話文と「始めのころはつり糸さえにぎらせてもらえなかった。」や「毎日与吉じいさにつった魚を届けていた。」というできごとを関係付け、太一と与吉じいさの関係を「与吉じいさに弟子にしてくれるよう頼んだ。」や「無理やり弟子になった。」「太一にバトンを託した」というように表現している。評価規準の「物語の会話文とできごとを関係づけて、登場人物の相互関係を捉え、人物の関係について人物紹介コラム（ひと）に書いている。」について十分評価することができる。

「カレーライス」を用いた力を確かめる活動では、「ひろしとお父さんは、本当は仲のよい親子である。ひろしは、お父さんのことが嫌になることもある。だが、自分のために料理をしてくれるそんなお父さんが好きだった。（中略）結果はあやまれなかったが、けんかをする前よりも仲のよい親子になったと思う。」とひろしと父の関係を会話文や出来事から捉えることができている。

これらのことから、「登場人物の相互関係について、描写を基に捉える力。」について習得できたと考えられる。

#### (3) 児童C

「おとう、ここにおられたのですか。また会いに来ますから。」という会話文と「この魚をとらなければ、本当の一人前の漁師には、なれないのだと思ったこと」や「クエを殺さずにすんだ。」を関係付けて、太一と与吉じいさの関係を「師である与吉じいさの教えにより、このクエもまた海のいのちだと思えた。」と表現している。表現が十分にではないが、長い間追い求めてきた瀬を殺さずにすんだことを与吉じいさの教えと関係付けることで、太一にとって与吉じいさが単なる師ではないことを捉えていることが分かる。評価規準の「物語の会話文とできごとを関係づけて、登場人物の相互関係を捉え、人物の関係について人物紹介コラム（ひと）に書いている。」について概ね評価することができる。

「カレーライス」を用いた力を確かめる活動では、「ひろしにとってお父さんは、普段はとっても仲がよくてとても優しいお父さんだ。しかし、ひろしは、ぼくは悪くない。だから絶対に『ごめんなさい』を言わない。ひろしと父は、けんかをしていた。（中略）『ごめんなさい』は言わなかったがmきつとちゃんと仲直りできた。2人の気持ちは、けんかというもやもやは消えて、いつもの仲のよいひろ

しとおとうさんにもどったと思う。」とひろしと父の関係を会話文や出来事から捉えることができる。

これらのことから、「登場人物の相互関係について、描写を基に捉える力。」について習得できたと考えられる。

## 4. 考察

### 4.1 「力をつけるモデル文にはどのようなものがあるか。」にかかわって

本実践は、「力をつけるモデル文にはどのようなものがあるか。」ということの問題意識にして単元をつくった。実際、力をつけるモデル文の1つとして、生活の中にある文章をもとにしたモデル文が効果的であると考えられる。それは以下の点で明らかになった。

- ・既習の学習材を使用しなかったことにより、児童が書き上げた（ひと）がテンプレート的な表現方法にならず、自分達の言葉を使って表現されていた。
- ・モデル文を丁寧に読みとることで、見通しをもつことはできていた。しかし、明確な形式があるわけではないので、まずは書いてみるが必要になった。書いてみて気づくこともあり、読むことと書くことが繰り返し行われ、児童自身の問いが更新され続けていた。
- ・生活の中にある文章なので、児童は「本当に自分達にできるだろうか」と言語活動に対する思いをもっていた。そのぶん、書き上げた後の達成感が充実しており、力をつけることができたと自信を持って振り返ることができていた。

### 4.2 単元を通した子どもの学びにかかわって

本単元を通して、児童の主体的で対話的な学びの姿が見られた。（ひと）を書くことで、新たな問いが生まれ、「太一と与吉じいさはどのような関係か。」という問いから「太一と与吉じいさの関係をどのような言葉を使って表せばいいか」という問いへ変わっていくなど、学習を進めるにつれて問いが更新されていった。また、学習課題を「登場人物の関係やそれについての自分の考えを、物語の会話文とできごとを関係づけて、人物紹介コラム（ひと）のように書く。」としたことで、児童は本単元で何をどのように学ばよいかを明確になり、教師の指示や発問を待つのではなく、主体的に学習に取り組むことができていた。日常的に「言葉の宝箱」で集めている語彙を、人物の関係を表せそうな言葉に絞り学級全体で集約、掲示していたことで、（ひと）に人物の関係を表現する際に、集めてきた言葉を活用している児童が多く見られた。また、モデル文を作成する際、参考資料を人物の関係について書かれているものにするすることで、モデル文に意図的に散りばめていた人物の関係を表す語彙を使っている児童もいた。

## 5. 展望

### 5.1 本単元の成果

本実践研究は、「力をつけるモデル文にはどのようなものがあるか。」ということの問題意識にして取り組んできたものである。3.2でも詳細に評価について検討したが、本単元では目標とする力を育成することができた。力をつけるためのモデル文として、既習の学習材をもとに作成したものでなく、生活の中にある文章をもとに作成したもので目標とする資質・能力の育成に有効であると考えられる。

例えば、既習の学習材を使用しなかったことにより、児童が書き上げた（ひと）がテンプレート的な表現方法にならず、自分達の言葉を使って表現されていた。実際の新聞記事をもとに作成するので、様々なパターンのモデル文を作成することができた。モデル文の（ひと）を複数パターン用意すること



で、自分に合った（ひと）を選択していた。このことが、言語活動での表現に多様性を持たせたと考える。また、書いてみることで、分かることや気付くことがあり、試行錯誤を繰り返しながら、自分たちの納得する（ひと）を作成していた。児童は、学習の時間いっぱい頭を働かせていた。また、学習課題に振り返ることで、学習の目標からそれる児童はいなかった。

## 5.2 今後の実践に向けての課題

読み取ったことを表現して終わりではなく、書くことと読むことを繰り返し行っていたので、予定していた時間数よりも多くなり、単元のサイズが大きくなってしまった。また、テンプレートがないということは書くこと、表現することが苦手な児童は、教師の関与が必要になってくる。手立てをしつかりと準備し、計画的な指導が必要不可欠である。本実践研究は、グループによる活動で（ひと）を書くことにしたが、児童の実態に応じて、個人で（ひと）を書くことも有効的であると考え。また、人物の関係を表す語彙の獲得が足りなかったため、「カレーライス」を用いた力を確かめる活動における表現が乏しかったと考える。言語活動を充実したものにする十分な語彙の獲得を目指す。

今後は「言語活動を充実したものにする十分な語彙の獲得はどのようにすればよいか。」という問いをもち、その方法について研究を進めていきたい。

なお、本実践研究は佐賀大学教授達富洋二先生の実践を参考にしたものである。

## 参考資料

- ・朝日新聞DIGITAL （ひと）神谷明日香さん 2018年1月8日掲載  
<https://www.asahi.com/articles/DA3S13303782.html>
- ・朝日新聞DIGITAL （ひと）十代目・松本幸四郎さん 2018年1月4日掲載  
<https://www.asahi.com/articles/DA3S13299338.html>
- ・朝日新聞DIGITAL （ひと）吉田鋼太郎さん 2018年12月16日掲載  
<https://www.asahi.com/articles/DA3S13275799.html>
- ・毎日新聞 （ひと）稲葉篤紀さん 2017年8月1日掲載  
<https://mainichi.jp/articles/20170801/ddm/008/070/039000c>
- ・毎日新聞 （ひと）藤井聡太さん 2016年9月4日掲載  
<https://mainichi.jp/articles/20160904/ddm/008/070/051000c>
- ・毎日新聞 （ひと）春風亭昇太さん 2016年5月31日掲載  
<https://mainichi.jp/articles/20160531/ddm/008/070/125000c>
- ・毎日新聞 （ひと）海部陽介さん 2016年2月26日掲載  
<https://mainichi.jp/articles/20160218/ddm/008/070/060000c>

付

- ・本実践は、佐賀大学教授達富洋二氏の実践「できごとと会話文を関係づけてひと発表会をしよう」を参考にした。

(佐賀市立若楠小学校教諭)